

---

---

## ホットニュース(平成14年度／第51号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／健康都市と都市評価

医学部の公衆衛生学の先生達を中心にした日本健康都市学会というグループがある。先日、都市計画家協会で学会長の高野健人東京医科歯科大学教授のお話をお聞きした。

都市の環境を評価するには様々な指標があると思うが、疾病率や平均寿命を、居住環境、都市環境、社会経済環境などを説明要因として分析しておられるとのこと、我々には新鮮な印象を受けた。全国の都市を対象に分析した結果、緑の環境には有意の説明力があるそうだ。

東京都の平均寿命は、以前はトップクラスであったが、現在は中位以下に落ちているという。かといって、必ずしも田舎の環境がすべて優れているわけではなく、都市的な刺激も元気の素であるらしく、この種の研究は端緒についたところのことであった。

いずれにしても、都市型社会が前提となり、他分野の研究者が自身の研究を進めるために、都市環境を分析の対象として取り組み始めたということであろう。

我々の分野でも、公共事業に取り組むに当たっては、投資効果を問われる時代になっており、効果を表す様々な評価軸が求められている。都市計画法の基本理念には、「健康で文化的な都市生活の確保のために」と詠われている。少なくとも基本理念は評価できるような評価尺度は必要ではないだろうか。

(代表取締役 堀田 紘之)

---

---

### ●再開発計画地に住む

私は都心三区にある武家屋敷跡地に住んでいる。戦災で焼け野原となった後の周辺の街並みは整然とし、大病院や学校がいくつも建ち並ぶ文教地区の隣には、大使館や宿泊施設、大規模なマンション群が林立している。そのなかで、戦災を逃れ、ぽっかりと時代に取り残された地区がある。狭小な住宅が密集する我が家の隣の一角。狭い路地には植木鉢が並び、窓辺には生活やコミュニティの気配が漂う。

「いつまでも住み続けられる街」を目指し「病院との連携」も構想されたまちづくりは、組合ができ再開発の勉強が始まってからでも10年が経過する。鉄道が2線もでき「東京の田舎を追放しよう！」という大看板は下ろされたが、百件を超える戸建住宅は未だ肩を寄せ合っている。首都高下の消防署から1分もかからないので、先日近所で発生した火災は類焼ゼロで収まった。しかし、高齢・単身者の多いこの地域でいつか実現する再開発ビルを、生活のかおりのない「安全な独房」としてはならない。

祖父が移り住んだ屋敷には、一部屋はある三和土(たたき)をもつ広い玄関の横に電話室や女中部屋、書生部屋が並んでいた。由緒ある家系というわけではないので蔵には何も入っていなかったが、時には要人も訪れ、夜中取材に来た新聞記者が落ちたことのある池のなごりの灯籠が、今も数基ごろごろしている。祖父は私が生まれる直前に逝去したが、古き良き屋敷は、父を含む4人の子供たちが建てた新建材の家にかわり、井戸も潰された。

私はといえば親族に対し、再開発へ協調することへの同意を促すことさえできなかった。前述の密集地区と再開発を待つ大規模な駐車場に囲まれた我が家には、解決しない相続問題が重くのしかかったままだ。(都市計画部 坂井 雅子)

---

---

### ●W杯で盛り上がる新横浜より

現在、私はW杯に沸く新横浜に住んでいる。7階の我が家からは国際競技場が一望でき、先日の日本×ロシア戦も外からの歓声で臨場感を味わいながらのTV観戦を楽しんだ。

これまで新横浜では、大会開催に向けて様々な整備がなされてきたが、その中から私が気付いた少しマニアックな整備について紹介したい。一つは、街のいたるところに情報案内版が設置されたこと。これには、昇降機付きの立体横断施設の位置や車いす対応のトイレなど、障害者施設の案内も盛り込まれており、最近弊社でも取り組んでいる交通バリアフリーの参考になる。

もう一つは、駅前広場のタクシー流入抑制策。新幹線駅ということもあって、駅前広場内に50台程度のタクシープールはあるものの、深夜などには前面道路まで乗客待ちタクシーの列が延びることがある。W杯と直接的な関係があったかどうか判らないが、3ヶ月ほど前から駅前広場の流入をナンバープレートで抑制している(曜日、時間帯によって奇数、偶数で分けて流入させている)。特に注目した点は、常時ではな

いが、ピーク曜日、時間帯には、タクシー協会の腕章をつけた人たちが、各交差点ごとにタクシーの誘導を行っており、違反車輛のチェックをしていた。もちろん抜本的な解決にはつながっていないが、同様の問題を抱える駅前広場は多いはず。タクシー協会も巻き込んだ取り組みとして着目したい。

最後に、駅前広場前の交差点の信号現示の変更。横浜市の大幹線道路である環状2号線上に駅前広場の進入(出口は別)の交差点があるが、この交差点の信号現示パターンが大幅に変更された。変更のポイントとしては、全ての方向で矢印信号による制御となり、歩行者と車の交錯が一切生じないように工夫されている。変更当初は馴染みのない現示パターンに戸惑いを感じるドライバーもいたかもしれないが、何より歩行者の安全性が高まり、車側からしても左折車輛の捌けがよくなったことで、以前より渋滞しなくなったように見受けられる。交通管理者としては特殊事例として、他での適用は考えていないと思うが、ここで大きな問題もなく、混雑の解消、歩行者の安全確保が実証されれば、他類似箇所での採用も考えられるのではないだろうか。

最も怖れていたフリーガンは今のところ大きな問題も起こさず、今月末の決勝戦がとて楽しみである。日本代表が、また、この新横浜に帰ってくることを祈っている！

(総合計画部 五十嵐 淳)

---

●青年海外協力隊レポートvol.12～モロッコ南部を象徴する城砦ーカスバ

---

迷路都市「メディナ」と並んで注目すべきは、「カスバ」と呼ばれる城砦である。世界遺産となっている「アイト・ベン・ハッドゥ」が中でも有名で、映画のロケ地として使われたこともある。モロッコの南部、アトラス山脈を越えた砂漠近くには、このカスバが大小無数に点在する。

カスバというのは元々、7世紀頃モロッコ北部に侵入したアラブ人の支配を逃れてきた先住民ベルベル人が築いたものだという。アイト・ベン・ハッドゥはその最初のカスバだということだ。近世のカスバは、近隣の集落を治める首長が住む宮殿であったとも言われている。が、現在はほとんどが荒れ果て、後から住み着いた数世帯が生活するのみのところが多い。

カスバは、四隅に望楼を持つメインの塔の周囲に、雇い人家族の家、家畜小屋やモスクなどが集まってできている。ある時代に全部が造られたわけではなく、何世紀にも渡って増築や改修が繰り返されている。また、古くなった部分の隣に新しいものを造り、古い部分は顧みられなくなっている様もうかがわれる。

いくつかのカスバは観光用に修復され、きれいに保たれているものもあるが、多くのカスバは崩れかけたまま放置されているようである。中には、管理人一家が住み着いて、観光客が支払わずかのお金で維持されているものもある。全てが全てを保存すればいいわけでもないが、モロッコの先住民ベルベル人の原風景として、貴重な遺産ではあると思う。

(都市計画部 酒井 タ子)

アルメックホットニュース(平成14年6月15日発行)

////////////////////////////////////